

毎日新聞

2月5日(日)

2012年(平成24年)

発行所: 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
〒100-8051 電話(03)3212-0321

毎日新聞東京本社

Q

「遺品整理士」とは?

故人が生前に使っていた家具や食器などを仕分ける遺品整理士が注目されている。故人が残した遺品は従来、遺族が整理していたが、高齢化や核家族化の進行で孤立死などが増加。遺品整理を負担に感じる遺族も増え、遺品整理士の需要は高まるとみられている。一般社団法人「遺品整理士認定協会」(北海道千歳市)から県内で初めて遺品整理士として資格認定された鳥谷部剛明さん(34)に仕事の内容や課題について聞いた。

【聞き手 須藤唯哉】

――仕事の内容を教えてください。
◆亡くなられた方の部屋の片付けを手伝いまして。遺族から依頼を受け立死された方の場合は不

て、遺品を形見分けにすることで、遺品を預かるから依頼されることもあります。現在は宮城のほか、山形、福島、岩手の4県をカバーしています。

動産業者や弁護士から依頼されることもあります。現在は宮城のほか、山形、福島、岩手の4県をカバーしています。

A

一期一会の思い持つ

――遺品整理士という職業と出会ったのは、1年以上前に高齢者の孤立死に関するテレビ番組を見て遺品整理士を初めて知りました。仕事を始めた当初は右も左も分からぬ状況だったのですが、遺品整理を扱う先輩

くなった故人を自宅で発見したという親族から依頼されました。仕事を終えた後に届いた手紙に

「(変わり果てた)遺体を発見した時の光景を忘れるることは一生ないと思

います。そこで前向きに生きていいく気

――印象に残っていることは?

――印象に残っていることは? 現場では、亡くなる直前まできれいに使っていた台所があつたりと、その人の生き様がはつきりと分かり、同じような現場は一つもありません。以前、心筋梗塞で亡

いました。――普段から心掛けていた。と書かれており、かったものを発見する

ことがあります。が、遺族から感謝されるとやりがいを感じました。

――印象に残っていることは? 遺品整理で最終的な

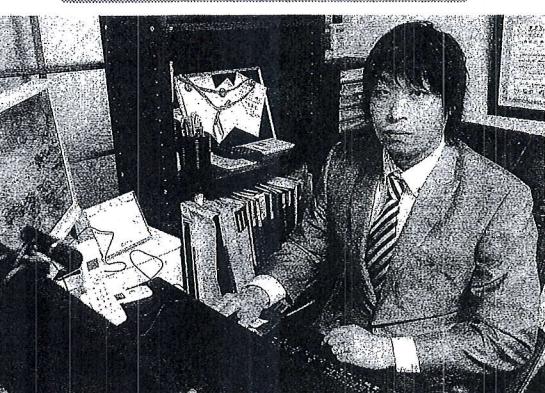
――普段から心掛けていた。と書かれており、かったものを発見する

こと。

――印象に残っていることは?

――印象に残っていることは? 遺品整理で最終的な

――印象に残っていることは? 遺品整理で最終的な



鳥谷部 剛明さん(34)

とりやべ・たけあき 1977年5月、仙台市生まれ。運送会社などに勤務後、31歳で独立し、ホームページを作成・管理運営する会社を設立。昨年新たに遺品整理業を専門に扱う会社「スマイルライフみやぎ」を始めた。

成講座を受講し、リポー
ラル、話題になった。



遺品整理士

不当に高額な料金を請求したり、不要品を不法投棄するなど悪質な業者が相次いで

ことから業界の健全化を図ろうと「遺品整理士認定協会」が昨年9月に設立された。同協会では養

成講座を受講し、リポー
ラル、話題になった。

みやぎ
この人に聞きた

――人生をサポート「感じた」
――聞いて一言

――人生をサポート「感じた」
――聞いて一言

が成り立つ」という一言が印象に残った。力を込めた言葉に遺品を仕分け

――人生をサポート「感じた」という強い意を

――人生をサポート「感じた」
――聞いて一言

が成り立つ」という一言が印象に残った。力を込めた言葉に遺品を仕分け

――人生をサポート「感じた」という強い意を

――人生をサポート「感じた」
――聞いて一言

が成り立つ」という一言が印象に残った。力を込めた言葉に遺品を仕分け

――人生をサポート「感じた」
――聞いて一言

が成り立つ」という一言が印象に残った。力を込めた言葉に遺品を仕分け